

2002 . 前期 / 指導教授：宮崎先生
日本語教育学理論研究
第二言語習得論 プロジェクトワーク B

日本語教育研究科修士課程 2 年 高木美嘉

課題 : 接触場面でのディスコースを収録し、調整行動が比較的よく出現している部分（2分程度）を文字化し、そこに現れる調整パターンを分析し発表し、レポートに書いて提出。

提出 2002 年 7 月 2 4 日（水）

分析資料（2者間の自然談話）

被験者：来日して半年たつスウェーデン語母語話者（本人によると、小さいころ英語圏で数年生活した経験があり、英語とスウェーデン語のバイリンガルであるという）の交換留学生と、日本語母語話者の大学院生（調査者本人）。交換留学生は、現在、別科の日本語 2 レベル（初級）で学習している。今年の 7 月末に帰国予定。

収録日時：2002.7.5 13:00～約 8 分。分析対象はそのうちの話し始め約 3 分。

フォローアップインタビュー：F S に 2002.7.19 に英語で実施。N S は調査者が内省を行う。

1. はじめに

今回収集したディスコースには、FSの発話に「いいよども」と「言い換え」が多くみられ、NSの発話には「言い換え」が多く見られる。このレポートでは、これら「いいよども」と「言い換え」というマーカーが現れたあと、それぞれどのような調整タイプが続くのかを観察し、その特徴を分析する。

そして、最後に、特に初級段階にある日本語学習者の発話にみられる「フラッグ」について考察する。宮崎(1999 a)における「フラッグ」の定義をもとに、今回の分析結果の「フラッグ」に焦点をあて、発話者の内省を参考にしながら再整理し、それら「フラッグ」が日本語母語話者にどのように受け取られるのか、そして受け取られた場合どのような調整が行われるのかについて考察してみる。

2. 分析

「いいよども」タイプの不適切マーカー

* _____は「いいよども」箇所

(No.18、26、38、42)： FSによる「自己マーク自己調整」

18	FS	<u>ああ、ちょっと、あ、私は、あの、</u> bachelor degree あります。	自己マーク(いいよども) 自己調整(語彙検索)	単純
26	FS	それから、 <u>ああ、う-わ、うえー、</u> ほんとは終わりません。でも仕事だいじょうぶ、それから...	自己マーク(いいよども) 自己調整(語彙検索)	単純
38	FS	<u>あ、それから...お金が、あ...それから、</u> みなさんは、um um 大学で勉強したい、あ、だいじょうぶ。	自己マーク(いいよども) 自己調整(語彙検索)	単純
42	FS	終わり。そう。でも、 <u>す、す、</u> とてもいい。でも、	自己マーク(いいよども) 自己調整(語彙検索)	単純

FSが「いいよども」によってFS自身の発話の不適切さをマークした後、FS自身で調整のデザインをするタイプが4つ見られた。これらは、自分の言いたいことを伝えようとして日本語を選択し話を展開しようとするが、適切に続けることができなくなると、いいよどもつつ、他の適切と思われる言葉を選択し直しているということが、FSへのインタビューによってわかった。このことから、これらの「いいよども」タイプの調整行動は「語彙検索ストラテジー」タイプの調整と考えられる。

また、FSの内省によると、自分の言いたいことがまず英語であって、そこから、適切な日本語の語彙に言い換えるということであった。そして、こうした言い換えの中でつま

ずく要因は、彼の場合、「日本語の語彙の不足が一番の原因である」と内省している。

以上のことから、初級段階にある日本語学習者は、「いいよども」によって、「自分の意図を伝えるには不十分な語彙知識の中で、自分が言いたいことを最大限に的確に伝えるための調整」が行われていると考えられる。

(No.2-3): F Sによる「他者マーク」(フラッグタイプ) / NSによる「自己調整」

1	NS	スウェーデンに帰って、それからどうするんですか。		
2	FS	はい...	他者マーク(いいよども)	単純
3	NS	うん、それから、	自己調整(No.1のくり返し)	
4	FS	あ、ああ、はじめ?		

NSの内省によると、FSが「はい...」という「いいよども」によって不適切さをマークした、とNSが受け取ったので、「はい...」は「フラッグ」タイプの他者マークとなる。そして、NSは、No.1の「それから」をNo.3でもくり返して、FSの理解を促すための調整を試みようとし、No.4で「あ、ああ」と理解が促されてその後会話が展開し始め、調整は成功している。

また、FSへのインタビューにより、FSも、NSのNo.1の発話にどう答えればいいのかわからなかったということである。もし、FSのNo.2が「はい?」と上昇イントネーションで発声されていれば、調整要求がより明示的になるので、No.2は「調整リクエストマーカ」になり、調整はより安定したものになると考えられる。

「いいよども」タイプの不適切マーカーのまとめ

「いいよども」は、リズムとして間を取る、自分自身でよく考える、言いたくないことを濁す、相手に調整を促すなど、場面や状況、文脈によっていろいろな意味を伝える効果のある会話ストラテジーである。その中で、ある「いいよども」が調整を促す「フラッグ」となるかどうかは、FSの音声的な言い方や外見的な様子(表情など)そして文脈の流れが影響する。またそれと同時に、NSがその「いいよども」をどう受け取るかにも依存している。

「言い換え」タイプの不適切マーカー

* ____は____の言い換え

(No.20-21, 12-13):

FSによる「自己マーク」(フラッグタイプ) / NSによる「他者調整」

20	FS	ああ、 <u>先週</u> 、おう、 <u>先週じゃない</u> 、 <u>ま</u> ま、 <u>毎週</u> 、 <u>last year</u>	自己マーク(言い換え)	単純
21	NS	うんうん、 <u>去年</u> 。	他者調整(説明)	

FS自身が「先週、おう、先週じゃない」と不適切さを自己マークし、3回「言い換え」による語彙検索をしながら自己調整を試みている。しかし、適切な日本語が選択できず調整に失敗したところで、No.21でNSが適切な言葉で「言い換える」ことで「他者調整」を行っている。ここでは、発話者同士が共同で「言い換えていく」ことで調整をはかるというパターンがみられる。

11	NS	え、仕事は九月から？		
12	FS	九月... ああ、はい、 <u>九月</u> 。	(main sequen として考えていた様子)	
13	NS	<u>九月から</u> 。	他者マーク(言い換え)	単純
14	FS	九月。	自己調整(言い換え)	

No.11の「九月から？」という質問に対してFSが「九月」と言ったので、NSは意味が通じたかをもう1度確認するために、No.13で「九月から」ともう一度言い換えている。

(No.15、17、53)： NSによる「自己マーク自己調整」

15	NS	FSさん、 <u>大学は？スウェーデンの大学は？</u>	自己マーク(言い換え) 自己調整(説明)	単純
----	----	------------------------------	-------------------------	----

17	NS	もう、 <u>終わり？卒業？</u>	自己マーク(言い換え) 自己調整(説明)	単純
----	----	--------------------	-------------------------	----

53	NS	あ、 <u>スウェーデンは9月から学校？学校が始まるのは9月から？</u>	自己マーク(言い換え) 自己調整(説明)	単純
----	----	---------------------------------------	-------------------------	----

発話者同士が共同で「言い換えていく」調整がある一方で、発話者が自分自身の発話の中で「言い換えて」調整をしている例が3つ見られた。

これらは、NS自身がFSからのマークを待たず、自分自身の中で、「不適切かもしれない」と自らマークをして、文や語彙を自分の発話の中で「言い換え」ながら調整を行っている。No.15,17,53はいずれも、NSの内省によれば、FSの言葉によるマークも、非言語によるマーク(例えば、わからないという顔つきをしている)もなく、ただ、自分の中で、「わからないかもしれない」と考えながら話していた。

(No.55): 「他者マーク他者調整」(サポートマーカータイプの調整)

54	FS	うん、がっこうは <u>きゅう月</u> ...		
55	NS	<u>く月</u> から。	他者マーク(言い換え) 他者調整(説明)	単純
56	FS	はい。そうですね。はい。		

F Sによる不適切さのマークや調整の要求は行われませんが、F Sの発話 No.54「きゅう月」をNSが No.55 で「く月」と「言い換え」ることによって直接調整を行っている。NSの内省では、F Sは自分の誤用に気が付かず、文意に対して「そうですね」とうなずいていると思った。また、実際は「きゅう月」でも文意はわかったので、NSの目的は意味交渉というよりは、チューターとしての誤用訂正にあったと内省する。結局F Sは不適切さに気が付かず、No.56 で主な流れ (main sequence) に戻っていると解釈した。

(No.41-42): NSによる「他者マーク」/ F Sによる「自己調整」

40	FS	でも、たぶんアメリカはお金ありません。 (コツ 注：舌を鳴らす音)		
41	NS	<u>終わり</u> 。	他者マーク (非言語を言語に言い換える)	単純
42	FS	終わり。そう。でも、す、す、とてもいい。でも、	自己調整	

No.40 でF Sは、アメリカでは大学生が大学の授業料を払えなくなると、そこから学業は続けられなくなるということを書いたのだが、「学業が続けられなくなる」という内容を日本語で伝えきれなくなり、「終わり」を意味する非言語(舌を鳴らす音)で伝えようとした。NSはそれを「続けられなくなる」という意味だと推測したが、その意味が適切かどうかを確かめるために No.41 で「終わり」と他者マークをして確認をとったことが、内省を通して明らかになった。

このように、非言語で伝えられた意味を確認するために言葉で置き換えるのも、ことばの「言い換え」と同じ調整効果をもつ会話ストラテジーと考えられる。

F Sによる「確認チェック」タイプの調整リクエストマーカ-

(No.4-5, 32-33): F Sによる「自己マーク」/ NSによる「他者調整」

4	FS	あ、ああ、はじめ？	自己マーク(確認チェック)	単純
5	NS	うん。	他者調整(確認)	

F Sは、No.1のNSの質問に答える発話を始めるにあたって、No.4で「はじめ？」と語尾を上げて「自己マーク」することで、相手に「はじめて」という言葉の適切さを確認していると考えられる。

32	FS	わかりますか。	自己マーク(確認チェック)	単純
33	NS	ああ、わかりました。わかりました。	他者調整(確認)	

F Sは、「わかりますか」という自己マークにより、自分が伝達している情報がうまく伝わっているかを確認している。

2. 考察： 会話における「フラッグ」について

宮崎(1999 a)によると、「フラッグ」は、「自らの意図とは異なる内容を表出し、フラストレーションを起こした結果現れる一時的なポーズなどは、他の参加者に対してはっきりとした発話意図を伝えることができず、問題の発生を知らせるにとどまることが多い。こうした現象は、問題が発生したというシグナルを出す旗のような役割を果たすので、フラッグ(Flag)というラベル化することにする」と定義されている。

また、「フラッグ」の性質として、「調整リクエストマーカと異なり、直接調整を引き出す調整リクエストとしての発話意図は100%伝達できないので、調整を求める直接的な引き金にはならないことが多い」としている。

つまり、この定義を視点を変えて考えてみると、「フラッグ」とは、調整リクエストとしての発話者の自覚的な発話意図がない場合でも、聞き手がそれを「フラッグ」と受け取れば、「フラッグ」として機能したことになるとも考えられ、ここに、「フラッグ」の特色があると筆者は考える。つまり、「フラッグ」とは、発話者の調整リクエストとして間接的に機能するだけでなく、広くは、発話者を含めた会話の参加者全員が利用できるものであり、Main sequenceを適切に展開させていくための、「展開を推進する調整マーカ」としても機能すると考えられる。「展開を推進する」ことによって、発話の参加者たちは、意味を共有する機会を増やすことになり、意味交渉を文意レベルで深めることができるようになる。

また、「フラッグ」は、発話者の調整リクエストとしての発話意図を十分に伝えきれないというネガティブな見方がある一方で、参加者(聞き手)にとっては、「それって～っていうこと?」「～って言いたいのか?」というように、自分の解釈の方向に文意を展開させようとする事ができるという、利用の仕方によってはポジティブな一面もあると考える。

また、このように、フラッグを「参加者が利用できるもの」と仮定すると、「フラッグ」

にはそれを見る立場によって2種類の面があると考えられる。1つは発話者が不適切だとした時点で意図的に掲げる「フラッグ」で、これは相手に積極的に調整を促すものではなく気づかれにくいので、「自己マーク自己調整」になりやすい。これを仮に「自己フラッグ」と呼ぶ。もう1つは会話の参加者が、発話者のなんらかの類型的な言語あるいは非言語を「フラッグ」と受けとる場合で、この場合は「他者マーク自己調整」になりやすい。これを仮に「他者フラッグ」と呼ぶ。

さて次に、こうした「展開を推進する調整マーカ―」としての「フラッグ」を抽出するために、「フラッグ」がどのような形で会話に現れるかを整理してみようと思う。宮崎（1999a）では、「言語的かつ非言語的要素で構成されている...（中略）...フラッグとして分類されるものの中には、不完全発話、間投詞、問題が発生した箇所の繰り返し、ポーズ、またはこれらの組み合わせが考えられる」としている。このほかに、「問題が発生した箇所でのいいよども、（繰り返しではない）言い換え、（ポーズではない）完全な沈黙」や、非言語の要素として、「顔の表情、目の表情、首を傾げる等の動作、手の動作」なども実際には不適切マーカ―となりうると考えられる。

以上の定義に基づいて今回のディスコースを観察すると、約3分の中に9つの言語的な「フラッグ」が確認でき、この中で、調整行動に結びついたものはNo.2,12,18,20,26, 54である。発話者FSの内省によるとNo.2と20は何らかの調整を促す意図があり、あとは調整を特に相手に促す意図がないとのことである。

「フラッグ」と考えられる箇所

2	FS	はい...
10	FS	そう。とても、あ、100%は focus, あー、...でもおもしろい。
12	FS	九月... ああ、はい、九月。<ポーズ+問題が発生した箇所の繰り返し>
16	FS	ああ、<間投詞>
18	FS	ああ、ちょっと、あ、私は、あの、bachelor degree あります。<いいよども>
20	FS	ああ、先週、おう、先週じゃない、ま、毎週、last year <間投詞+言い換え>
26	FS	それから、ああ、う-わ、うえー、ほんとは終わりません。でも仕事だいじょうぶ、それから... <間投詞+ポーズ+不完全文>
38	FS	あ、それから...お金が、あ...それから、みなさんは、um um 大学で勉強したい、あ、だいじょうぶ。 <いいよども+間投詞>
54	FS	うん、がっこうはきゅう月... <不完全文>

ここで注目するのは、相手に調整を促す意図はなかったという場合でも、参加者によって調整が行われている場合、つまり「他者フラッグ」となっている場合があることである。今回の場合は、No.12のポーズがNSによって「フラッグ」と受け取られ、No.54では、

不完全文であることで「フラッグ」となり、NSによってサポートタイプの調整が行われた。

また、今回、相手による調整が行われなかった箇所も、NSの受け取り方によっては「他者フラッグ」となりうる。たとえば、No.26は、<間投詞+ポーズ+不完全文>によって不適切さが示されているが、今回はNSはこれを調整していない。これは例えば、NSが「ああ、いい仕事が見つかったのね?」とか「マスターを書かなくても、いい就職先が見つかったのね?」というように、「聞き返し」によって意味交渉をはかることもできたはずである。このように、調整要求は強くないものの、不適切さが示されているこの箇所を、参加者NSが調整をしなかったのは、発話者の内省によれば、「フラッグ」と認識しながらも「相手の発話を待つ」というティーチャートークの姿勢があったからであると考えられる。

最後に、「フラッグ」と参加者の受け取り方についての仮説を述べてみたい。今回内省をして考えたことは、「どんなマークでも調整しようとする」姿勢にあるか、「マークがあっても調整しない」姿勢にあるか、という「受け取り側の姿勢」の違いが、「フラッグ」が調整につながるかどうかに影響がある、ということである。これは、「フラッグ」が明示的な「調整リクエストマーカ」と特に違うところで、「調整リクエストマーカ」は無視しにくい、「フラッグ」の場合は、受け取らない、という方向がありうることに特色であると考えられる。

受け取る側が「フラッグ」を認識しながらも調整しない理由には、理論的にいくつか考えられる。たとえば、「Main sequence が軌道に乗っているので、あまり乱したくない」「調整しているより、Main sequence としての結論が知りたい」などがあるだろう。そして、今回のように、「日本語のリズムがまだつくれぬ初級段階の学習者のゆっくりとした発話を待つ」「相手の少ないボキャブラリーを考えると、ことばを言い換えて意味の調整をはかるよりは、多少少なくとも相手のことばから推測して Main sequence を続けていくほうが混乱がない」という観点のティーチャートークが要因のこともあると内省から仮定する。これは、今回の資料だけでは検証できないので、仮説としてここに挙げるにとどめておく。

3. まとめ

今回、調整行動の中でも、特に「フラッグ」とそれに伴う調整の方向のバリエーションをみていて、調整行動には、発話者が投げかけて相手（参加者）が受け取る、というタイプのものだけではなくて、相手（参加者）が積極的に調整をデザインしようとするところから始まるものもあるのではないかと考えた。また、「不適切さ」をマークするだけではなく、文意の「不確実さ」をマークして調整しようとするものもあるのではないかと考えた。今回の調査だけではこれらの仮説の十分な検証はできなかったが、今後の私自身の談話研究の中で、この観点を活かし、検証していきたい。

参考文献

宮崎里司 (1999 a) 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古稀記念論文集刊行会編 明治書院

(1999 b) 「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン：自己マーク自己調整を中心として」『早稲田日本語研究』第7号 早稲田国語学会